

心理臨床における自由について

西 見奈子

その昔、京都大学（京都帝国大学）に安田徳太郎という人がいた。彼は京都の三条大橋にあった足袋屋の息子で、裕福な家庭に生まれ育ち、治安維持法に反対して殺された山本宣治とは従兄弟の関係だった。幼い頃からふたりは仲が良く、安田が京大の医学部に入って医者になると、山本が熱心におこなっていた左翼活動に医師として協力した。1928年に日本で初めての普通選挙がおこなわれたが、安田はその選挙期間中ずっと往診カバンをさげて、労働農民党から出馬した山本宣治について歩き、その選挙活動を支えていたのだという。やがて安田は京都大学をやめ、東京へ移り住んだ。東京に移り住んでからは、ますます社会活動に熱心となり、日本とソ連の交流組織「ソヴェート友の会」を創設したり、特高の拷問で亡くなった小林多喜二の遺体の解剖をおこなうために奔走したりした。そうした時代に立ち向かうあり方は、特高警察の目に留まり、幾度となく取り調べを受け、ついにはソ連のスパイを疑われてゾルゲ事件で逮捕された。まさに波乱の人生であった。

彼の特筆すべき点は、そうした人生の中で、多くの書物や翻訳を手がけたことである。日本で最初にきちんとした形でのフロイトの翻訳本を出版したのも彼であった。1926年にアルスという出版社からフロイトの著した「精神分析入門」の上巻を出版している。その2年後には「精神分析入門」の下巻を、その翌年1929年にはロゴス書院から「芸術と精神分析」、さらに1930年には再びアルスから精神分析大系第一巻となる「ヒステリー」を訳出した。当時から現代に至るまでフロイトの翻訳本の中には怪しいものも多い。当時で言えば、実際にはフロイトが書いていないものをフロイトの本として出版していたり、かなりの部分を省いた要約（意識）を出版したり、といったひどい代物もあった。安田の訳したものは、現代でも十分読む価値のあるものである。さらに関心のある方は、安田自身が書いた自伝的作品『思い出す人びと』（1976、青土社）を読んでいただきたいが、安田徳太郎のそうした破天荒な人物像、特に彼のエピソードが放つ「自由」な空気は、私の中の京都大学のイメージと重なるものである。

ところで私は一体、彼の何を自由だと感じるのだろうか。おそらくそれは、下手したら死んでしまうかもしれないという多くの時代的制約がある中で、常に自分の感情や欲求、興味、倫理感に開かれた態度を示し続けた点であろう。無理解や無鉄砲とは違う。状況を深く理解し、不安や恐れを抱きつつも、自分の感じているものを信じ、貫こうとする態度は自由なものである。晩年、著作における誤りを指摘された際、彼は過ちを認め、その後の著書の中で自説を撤回したことは知られたエピソードである。そうした態度もまた自由なものであろう。

自由は心理臨床でもよく議論されるトピックのひとつだ。なかでも精神分析においては自由連想を基本と

し、そのあり方は、クライアントにはもちろん臨床家にも要求されるものである。フロイトは臨床家が取べき態度について次のように述べる。

「自分の感知能力の意識的作用はすべて遠ざけておき、自分の『無意識的記憶』に完全に委ねよ」あるいは純粹に技法的に表現するなら「耳を傾けよ、そして何か気づくことがあるかを気にかけるな」

これは何も頭を空っぽにして面接に挑めということではない。こうした態度は、様々な理論を深く学び、訓練を重ね、とことん自分についてもクライアントについても考え続けた時によりよく立ち現れてくる態度だと私は考えている。自由になるためには準備が必要である。すなわち、臨床にとっての自由さとは、赤ん坊の自由さではなく、言葉を学び、数字を憶え、社会のルールを知り、豊かな知識を身につけたところでようやく手にすることのできる青年の自由さだと思う。

当臨床教育実践研究センターは、心理教育相談室を通して心の支援を実践するとともに、心理臨床家の教育、研究を支える機関である。この場所が様々な活動を通して、学生の、または専門家の、あるいは一般市民の心の自由を守り、育む機関であってほしいと願うところである。